
■ さろん | Mail News 2018/5/16 | #115 ■ 【読み物号】

ご案内不要の方はお手数ですがこのメールにそのままご返信ください。

哲学カフェ及び関連イベント情報をお送りします。みなさんの興味・関心の一助としていただくとともに、今後とも「さろん」を応援いただければ幸いです。

なお、このメールニュース掲載のコラム等は執筆者の個人的な考えを表したものです。会や専門領域における統一見解や事象を扱っているものではありません。予めご了承ください。

====Vol.115 2018年5月16日(水)====

さ | ろ | ん |
└ ─ ─ ─

M | a | i | l | N | e | w | s |
└ ─ ─ ─ ─ ─ ─ ─ ─ ─

<http://salon-public.com/>

(バックナンバーはHPからご覧いただけます)

<https://twitter.com/salontetsugaku>

<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>

INDEX

- | 【おしらせ】 (5/29) おしゃ Café ゆるーム/テーマ：「(当日募集)」
 - | 【1】 コラム/エッセイ
 - ◇ 『意見の対立について想う』
 - ◇ 『朱に交わる時』
 - | 【ご案内】 「さろんラボ」企画を募集しています
 - | 【2】 コトバをハーバリウムする
 - | 【3】 さろんアーカイブの遊歩道
 - | 【4】 読者からの特別寄稿/ハイバイ『ヒッキー・ソトニデテミターノ』くらちさん
 - | 編集後記
-

CONTENTS

【おしらせ】

(5/29) おしゃ Café ゆるーム
テーマ：「(当日募集)」

通称『ゆるカフェ』。ゆるやかに営業中です。

今月のテーマは「(当日募集)」。

直観重視で、胸に手を当てて、おしゃべりしたいテーマを持ってきてみてください。

それもいいね、そっちも面白そうだね、とウロウロしながら、「いま話したいこと」の中心をゆる〜く掘りさげてみましょう。

5月29日(火) 19:15 オープンです。

今月も例によって例のごとく少人数で集まって、ゆったり考えたり感じたり聞いたりしてみます。ゆるっと奏でる月イチのセッション、お気軽にいらしてください。

定員5名まで ※最少挙行人数3名

5月29日(火) 19:15 - 21:30頃

代々木近辺の喫茶店(申込者にご案内)

参加費100円(別途、注文した飲食費実費をお支払いください)

お申込み: salontetsugaku@gmail.com

(幹事: せりざわ)

【1】コラム/エッセイ

- | | |
|----------------|--------|
| ▽【意見の対立について思う】 | 一生 |
| ▽【朱に交わる時】 | セリンジャー |

▽【意見の対立について思う】 一生

対話で解決できるか。どのような間柄の二人でもときに意見は対立をする。互いの意見が食い違ったときに「自分は間違ったことを言っていない」と思い込む(自己の可謬性を疑わない)ことがある。そうなってしまうと、相手の意見だけを批判して自己の正当性を相手に認めさせようとする。自己の正当性に固執をしている限り、ある程度互いが感情的になってしまうのではないか。自己の承認をめぐる闘いの枠から出られない。権力闘争となり、論争が始まってしまう。

論争(ディベート)は互いから検証される。どちらの意見がより妥当(理がある)か、いずれかの意見には誤謬や事実誤認はないか。一定のルールの下で感情を排して、論理的に二つの意見が吟味される。どちらか一方の意見の方がより妥当となって決着が付く場合もあるが、そうならない場合もある。例えば、一方の意見が概念Aにより優位な価値判断をする反面、他方は概念Bにより優位な価値判断をするという状況である。概念AとBのどちらにより優位な価値があると判断できるか。

ある二つの概念を巡る価値判断で対立しまうと、この対立を論理による対話、協議等で解決しようとする試みは今までのところうまく行っていないようである。国内のニュースだけでも具体例を

挙げれば、憲法を巡る自民党（改正）と立憲民主党等の野党（護憲）間の対立、大相撲の土俵上の女人禁制を巡る対立は、異なる概念に対する価値判断の相違に起因していないか。このような対立は論理では解決できないのかもしれない。だが、哲学対話で互いが対立点を自覚することを通じて、何か突破口が生まれることを信じたい。

▽【朱に交わる時】 セリンジャー

「朱に交われれば赤くなる」という諺があります。朱色が入り混じれば赤味を帯びるように、人は付き合う人の良し悪しによって善悪どちらにも感化されるものという意味で、「だから付き合う人間はよく見極めよ」という戒めとして多く使われます。

唐突で恐縮ですが、ここで、昭和の男性サラリーマンの哀切を描き続けた作家・山口瞳と、当時すでに文壇の大御所になりつつあった時代小説の大家・山本周五郎との交流を紹介したいと思います。人付き合いを考える上で大変興味深いエピソードだからです。

山口は『江分利満氏の優雅な生活』で直木賞を受賞して評判が上がり、会社を辞めて筆一本で立つことを決めた前後のことをこう述懐しています。『その頃、私は、しっかりした会社の中堅社員だった。三十六歳で課長補佐という地位は、公平に見て、会社でも私に多くの期待をかけていたことになる。私も、ずっと、がんばっていた。そして、私は、二十歳の頃から、どんなことがあろうとも生産の現場を離れないぞ、と思い定めていた。生産の現場を離れている奴は、どんなに偉そうなことを言ったって人間じゃないんだぞ。あいつ等は人非人なんだぞと思っていた。そんなふうになるところが、よくもわるくも、私の身上なのである、と考えていた。これを取りはずしたら「私」というものが無くなってしまう』（山口瞳「〈男性自身 169〉 山本さん」）。

自分の矜持を貫こうとする一方で、山口は矛盾も抱えた人間でした。こう書き綴っています。『白状すると、私はサラリーマン生活を続けて、のんびりと一年に短編小説を一作書くという生活をのぞんでいたし、それに憧れてもいた。小説というものは、自分で書きたいものを書き、しかるべき編集者に見てもらって、折りあいがつけば掲載していただくという性質のものだと思っていた。専門用語でいえば「持ちこみ」である。それと矛盾するようだが、私は作家というものは、もっと激しく生きるべきものだという考えがあった。そのへんが、もやもやとしていて、どうにも收拾がつかないのである』（同上）。

ちょうどこの時分、高名な先輩作家・周五郎から山口へ、編集者を通じて対談の打診がありました。山本周五郎は山口より先に『日本婦道記』で直木賞に選ばれています。しかし受賞しながらも毅然として受け取らず、以後一切の賞を辞退した剛毅な傑物です。この場合打診とはあくまで形式上のことで、文壇の常識から言っても「周五郎からの対談依頼を受けない」という選択肢はまずあり得ません。しかし山口は『山本さんとむかいあって坐るということだけでも、たいへんな労働であった。私は疲れきっていた』（同上）とその打診を断り、結果的に周五郎をカンカンに怒らせてしまうのです。

山口の振舞いは、新人が直木賞受賞で有頂天になって先輩作家に大変な無礼を働いたと受け取られる可能性がありました。そのせいであの山本周五郎から大顰蹙を買った、と。しかし、周五郎の

憤りはそこに由来するものではありませんでした——『そうして、やっと、いまになってはっきりとわかったことなのだが、山本周五郎さんが、そんなにまでして私に会いたがったのは、私がそういう状態にいることを知ったからであった。その山本さんを私は裏切ったのだった』(同上)。

周五郎は『さぶ』でつとに知られるように、弱いものへの限りないまなざしを持った作家です。ですがその一方、直木賞を辞退してしまうようなへそ曲がりな男でもありました。それゆえ、山口の矛盾を抱えて前進も後退もできず身動きが取れない状態をよく見て取っていたのでした。対談に対する後輩の葛藤を承知の上で、まさにそれ故に対談を申し込んでいたのです。

もしこのときの二人が同じ席についていたら、いったいどんな対話になったのでしょうか。打診した側には打診者なりの思惑があり、拒否した側にもそれなりの理由がある、それは当然のことでしょう。二つの異なる思惑がつつがなく交流する保証などどこにもありません。ですから単なるすれ違いの一つとして記憶の彼方へと葬られてもおかしくない挿話なのです。にもかかわらず、山口はこのことを連載エッセイに複数回に渡って書き残しています。それがなぜだったのか。こんな風に考えることができるかもしれません。

直接のやりとりはなかったものの、山口と周五郎の間に非言語的な交流が生まれていたからだと思います。山口は結果的に「敬して遠ざける」という態度を選択してしまったものの、自分がかけられていた(であろう)励ましに思い至ったり、周五郎への敬慕がさらに深まったり、自分のことしか見ていなかった狭量への反省があったりしたのでしょう。そうして自分の非を素直に認める誠実さから、山口は筆を取ったのだと。この筆を取ることで、往時の周五郎の呼びかけに応えようとしたのだと。

この二者の交流をあなたならどう見るでしょうか。

冒頭で「朱に交われれば赤くなる」を紹介しましたが、ある人との付き合いが自分にとって益であるのか否か、交流の真っ最中に評価するのは実際かなり難しいことです。その一方で、他者との交流によって自分が大きく感化されたり変わったりするということを、私たちは経験から深く理解しています。そう考えたとき、「朱に交われれば赤くなる」とは、人付き合いの善し悪しや「だから付き合い合う人間はよく見極めよ」という警句である一方、前提になっている大事なことがらをあらためて気づかせてくれる言葉なのかもしれません。

それはつまり、朱(=他者)と交わることによって自分自身に変化する可能性の(想定外の、あるいはコントロール不能の)大きさのことです。他者と交わったとき、わたしたちは、思考面でも感情面でも、多大な感興、影響を受けます。だからこそ「さろん」では、「さろん」で実践される対話や交流を介して受け取るポジティブな側面を、具体的かつ戦略的に、哲学プラクティスというベクトルに沿ってデザインしています。他者と交わることでしかまなべないことの価値を大切に、それを丁寧に実践し、誠実に探究し、積み重ねていくこと。それが、場を設けるに際しての「朱に交われれば赤くなる」の解釈です。

市井に生きる庶民や名も無き流れ者を愛し、描き続けた不世出の作家・山本周五郎も没後半世紀を数えました。その著書の中には、辛酸を嘗め尽くし志半ばで力尽きてしまう者も少なくありません。今年周五郎作品はパブリックドメイン入りし、代表作『縦の木は残った』や『その木戸を通して』などが各社から刊行されています。その作に触れ、彼一流の抒情に触れてみてはいかがでしょうか(きっと感じるものがあるはず)。読まれたらぜひ感想を聞かせて欲しいなと思います。その時、新しい朱が交わり、つぎの対話の幕が上がるのではないのでしょうか。

【ご案内】

「さろんラボ」ではみなさんのやる気とアイデアを募集しています♪

名称：【さろんラボ】

コーディネーター：【大村】

「さろんラボ」、常設しています。このさろんラボではみなさんの「やってみたい」を核に、「さろん」を触媒にして、どんな化学変化が起きるかを試みる場所です。さろんラボは当面継続して設けていきます。

さろんの参加者の手で、以下の2つのイベントがうまれました。

【さろんラボ 001】 「あたまの中を散歩するてつがくカフェ」

<http://sanpo-tetsugaku.jimdo.com/>

【さろんラボ 002】 「哲学カフェ Ante-table/アンティ・テーブル」

<http://ante-table.wix.com/ante-table/>

既存の哲学カフェのカタチに限定せず、みなさんの中で温まっている関心ごとやご興味を添えて、どうぞお気軽に下記までご連絡下さい。みなさんとの新しい化学変化を、スタッフ一同心から楽しみをしています。

▽詳細はこちらまで

salontetsugaku@gmail.com (担当：大村)

【2】

コトバをハーバリウムする #31 (や)

本のコトバから

しかし、こうした協力体制を築くには、類人猿にはとうてい望めないような複雑な認知スキルが必要となる。

各人が「心の理論」(他人が何を考えているかを直観的に理解できる心機能)、言語コミュニケーション能力、推論能力、衝動を抑える能力を備えていなければ、協力関係の成功は望めない。

——ダニエル・E・リーバーマン 『人体 600万年史 科学が明かす進化・健康・疾病 (上)』

歌のコトバから

There were incidents and accidents
There were hints and allegations

If you'll be my bodyguard
I can be your long-lost pal
I can call you Betty
And Betty, when you call me
You can call me Al
Call me Al

ちょっとした事件もあったし、ぞっとしない出来事もあった
手がかりもあったし、言いがかりもあった

僕のボディガードになってくれるなら
ずっと音信不通の君の友だちになるよ
僕は君のことベティって呼ぶから
ベティ、君が僕を呼ぶときは
アルって呼んでいいんだよ
アルって呼んでくれよ

——ポール・サイモン 『You can call me Al』 (作詞：ポール・サイモン)

【3】

さろんアーカイブの遊歩道 #25 (猯)

カテゴリ：さろんメールニュース No.1 (2011.6.1)

発行日： 2011年6月1日

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2013/06/1_Mail_News_20110611.pdf

7年前のいま頃、独自のパブリケーションツールとしてメールニュースが企画・構想されていたらしいです。この第1号を読むと、手さぐりな感じがひしひしと伝わってきて、「始めから完成しているものなんてないだろうなー」という気持ちと、「きっと完成するなんてことはないんじゃないかしら」という考えが脳裏をよぎります。

どこからどう見ても「同人誌」って感じで。レイアウトとかデザインとかのビジュアル的な部分もそうなんですけど、記事やコンテンツの完成度(?)みたいなものがとっても素人っぽいのです。

でも、逆に考えると「いまや置き忘れてきたもの」かもしれないですね。わたしは不思議と、この頃のメールニュースの行間から、海のものとも山のものともわからない、金型に流し込まれて固まる前の情熱とかやる気みたいなものを感じたりもするのです。いまは持ち合わせていないような自由度みたいなもの。専門性を増していくということがどこかでその枠におさまりきらない贅肉を削ぎ落としていくことだとするのなら、わたしはその贅肉がどんな枠になら収まったのだろうかということに関心があるのかもしれない。

リアルなイベントとは別に、そのときどきにスタッフがどんなことを感じたり、考えたり、それを参加者のみなさんに伝えようとしていたのか。そういうことが文字として残っていることはけっこう面白いし、振り返ることの意義も出てくるんじゃないのかなとおもいました。公開日記というわけではないですが、いまわたしがどんなことを感じていたりするのかも、たまには文字にして残しておくのも良いかもしれませんね。ちょっとメタっぽくて。

【4】

読者からの特別寄稿／ハイバイ『ヒッキー・ソトニデテミターノ』くらちさん

・「あっちこっち紀行」　くらち　さん
哲学カフェを含め、あっちこっちの面白そうな活動に参加・行ってみた記録です。

○ハイバイ『ヒッキー・ソトニデテミターノ』
3月4日（日）@三重県文化会館　小ホール

演劇の内容について書く前に、演劇をみて私が思い出したことについて。

昨年、久しぶりに私は海外旅行へ行きました。
その時に痛感したのは、どうしようもなく自分が日本人だということでした。
そんなこと高い飛行機代を払って海外まで行かなくてもわかっている、当たり前じゃないかと思われれるかもしれません。
でも私はそのことに対して月並みな表現ですが、吐き気がするような嫌悪を感じました。
日本や日本人への嫌悪ではありません。
今の私は日本以外の国で生きていくことは多分できなくて、私の思考は日本的なものに縛られすぎている。
そういったことを嫌悪したのです。

『ヒッキー・ソトニデテミターノ』は引きこもりの人々が主要な登場人物の演劇です。
劇団を主宰している岩井秀人さんも、引きこもりとして過ごしていた時期があるとのこと。
家を出ようとする人や、社会に出て働こうとする人が登場します。
その人たちが旅に出る前後の自分と重なりました。
劇中では、引きこもり支援をしている人が、以前引きこもりだった森田くんこんなことを聞きます。

『(幸せになる) 保証がないんだったら、家の中にいるより、絶対に外に出た方が良いなんて、言えないでしょう?』

『でも、森田くん結局、あなたは外に出てきた。その理由はなに?』

あなたは、自分が家から外に出る理由を考えたことがあるでしょうか。

森田くんはその質問に答えることができません。

そして私は旅に出る前、知人から同じようなことを聞かれました。

「テロとかも起こってるし、海外に行くの危険じゃない? なんて行くの?」

私はこう答えました。

「日本にいても車が突っ込んできて明日死ぬかもしれないよね? だったら私は行けるときに行きたいところへ行くよ。

万が一私が行ってる間にテロが起こって死んだとしても、私はそれを寿命だと受け入れるの」

知人の心配を無下にする、ひどい回答だったのかもしれませんが。

ですが、森田くんのかわりに、外へ出る理由を答えたことにならないかなと思います。

「外国は危ないから日本にいれば安全だよ」

「家の外は危ないから家にいれば安全だよ」

この二つに通底しているものに私は強い嫌悪を感じます。危なそうなことはしないの? それ为正解?

私は森田くんと外に出ることについて語り合いたいです。

『ヒッキー・ソトニデテミターノ』は今年の3月、フランス・パリ公演の予定がありました。

「観劇したフランス人に感想を聞いてみたい」と心底思いますが、私は彼らと話すための言語を持ちません。

大学受験で点を取ることにしか目的にできない英語に辟易し、大学時代の外国語の講義も私にとっては居眠りタイムでした。

そんな日本に引きこもっている私ですが、旅で抱えてしまった嫌悪感に立ち向かうため、ものすごく重たい腰を上げて、まずは英語を勉強することにしました。

劇中にはこんな人も登場します。

28年自宅に引きこもっていた和夫さんは、外へ出る準備を始めます。

彼は外でのコミュニケーションを完璧にこなせるようにならないと出られないと考え、いろんなシチュエーションの台本を作って、ちゃんとできるよう家で練習するのです。

最初、滑稽なように思えました。でも、英語をぶつぶつ言いながら勉強している私とおんなじじゃない?

和夫さんも私も、滑稽なことをしているだけなんですか。

これで、外に出られるんでしょうか。

森田くんも和夫さんも、みんな、これがいいのかわからないけど外に対してあがいています。

「それなら、結果がどうあっても、私もあがいてやろうじゃないか」と思える、とてもいい演劇で

した。

あなたも、自分が家から外に出る理由を考えてみてください。

ハイバイ HP : <http://hi-bye.net>

※文中の台詞は台本より引用しました。

編集後記

メールニュース第 115 号をお届けします。

こんにちはフクロウです。ホロッホーウ。

関東では気持ちのいいお天気が続いています。陽ものびましたね。

みなさんはいかがお過ごしでしょうか。

さて。先週の日曜は朝さろんがありました。

この 4 月から参加者からのリクエストシーズンという形で実施中です。

本の推薦はもちろん、当日のお題の検討や当日の司会進行まで、任意でご担当いただきます。

5 月期はミラン・クンデラの『存在の耐えられない軽さ』。

世評に人気の高い小説ですが、今回ご参加の 11 名中でも特に女性からの人気の高さが感じられました。

文庫本の帯には「20 世紀最高の恋愛小説」とちょっとオーバーな惹句が巻かれてますが、じわじわと癖になる作品です。

会の様子の一旦は HP で紹介しています。

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2018/05/hondana_80_rev2.pdf

朝さろん、すこし気になってるけどまだ行ったことないという方、ぜひ一度遊びにいらしてください。

次回 6/17 (日) の推薦本は『影との戦い/ゲド戦記 I』です。

こちらも楽しくて奥深い時間になるに違いありません。

児童文学だから、とか、ファンタジーだから、と食わず嫌いの方がいらしたら、この機会にぜひ第 1 巻だけでも読んでみてください。お申込み絶賛受付中です。

『存在の耐えられない軽さ』では冒頭からいきなりニーチェの”永劫回帰”が紹介されます。

それに比べたら一回限りの人間の人生なんてものの数に入らない、意味という重力から切り離されてしまった限りなく軽いもの。

そしてそれに併せて、物語のなかでは偶然や意志の問題が引き合いに出されます。

参加者の感想に「いったい運命ってなんなんでしょうね」というのがありました。

そんなわけで (?), 今週土曜のさろん哲学のテーマは「運命とはどういうことか?」です。

運命とは「なにか?」ではなく、「どういうことか?」というところに、テーマ提起者(進行役)の個性がきらり光ります。

みなさん一度は運命について考えたことがあるのではないのでしょうか。
「それを考えるのがわたしのライフワークになってます」という方もいるかもしれません。
ぜひみなさんのお考えをお聞かせください。
そして一緒に運命について考えてみましょう。(…って書くと、なんか怪しい団体みたいですね)。
運命について哲学対話してみましょ！

今月末にはひっそりとゆるカフェもあります。
ちなみにおしゃ Café の”おしゃ”は”おしゃべり”の略。
初めての方大歓迎です。

今号に掲載の二本のコラムは、文章教室での指導を受けたものになります。
MNに掲載するのはいつも確定稿なので、初稿以降の途中経過はご覧いただけませんが、元新聞記者の先生の的確かつ厳しいツッコミに耐えて、がんばって改訂しました。
たいへん貴重な経験でした。
今号だけでなくこれからの原稿作成に活かしていきます。

それではまた次号でお会いしましょう。ホウ。
編集: (フクロウ)

さろん | Mail News 2018/5/16
⇒次号 (6月1日発行予定)

さろん Mail News 第115号 / 2018年5月16日発行【読み物号】

編集・発行: さろん

salontetsugaku@gmail.com

<http://salon-public.com/>

<https://twitter.com/salontetsugaku/>

<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>

-
- ◇ 「さろん」にお知らせいただいたお名前・メールアドレスなどの個人情報は、当会からのご案内のためだけに使用いたします。
また、ご本人の同意なく第三者への提供はいたしません。
 - ◇ 「Mail News」の無断転載はご遠慮ください。転載ご希望の場合はご連絡願います。
バックナンバーはHPからご覧いただけます。
 - ◇ 【Twitter】 <https://twitter.com/salontetsugaku/>
 - ◇ 【Facebook】 <https://www.facebook.com/salontetsugaku/>
 - ◇ 【ホームページ】 <http://salon-public.com/>
 - 「さろん哲学」Web サイト <http://salon-public.com/tetsugaku/>
 - 「朝さろん」 Web サイト <http://salon-public.com/asa/>
 - 「さろん工房」Web サイト <http://salon-public.com/koubou/>

「あるばか学校」 blog <http://alpacagakkou.blog.fc2.com/>



"copyright (c) 2011-2018 さろん. All rights reserved."
